

令和2年度あきた型学校評価

(1) 豊かな教育のある学校の実現

評価領域	豊かな教育
------	-------

重点目標	「キャリア教育全体計画」に基づき、児童生徒が経験から考え、自分から行動する力を高める授業実践。	P
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 「キャリア教育全体計画」を基に立てた年間指導計画に従い学部毎に指導しているが、学部の接続をさらに緊密にしていく必要がある。 「キャリア教育全体計画」に基づいて、指導の形態毎に年間指導計画を見直す時期にきている。 授業のねらいと評価の妥当性をより高める必要がある。 卒業後を見据えて発達段階や生活年齢に応じた学習活動を充実させていく必要がある。 	
具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> 「キャリア教育全体計画」を見直し、小中高を貫く教育課程を編成する。 「キャリア教育全体計画」に基づいて授業のねらいと内容を見直し、授業改善する。 授業研究会等を計画的に実施し、教職員一人一人の授業力を向上させる。 	
目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> 新学習指導要領の趣旨を踏まえ、児童生徒理解に基づく指導目標と学習活動を明確にし、授業実践と評価を行う。 教育課程検討委員会のメンバーを拡大するなどして計画的に実施する。 教職員全員が授業研究会等を計画的、継続的に行う。 公開研究会を9月に実施し、多方面の意見を参考に実践的な研究を進め、その成果を発信する。 教育資源やそれを活用した教育活動を整理し全教職員で情報を共有する。 	
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 公開研究会を9月に予定していたが、コロナウィルス感染防止のため校内研修会に切り替えた。 全校体制でキャリア教育全体計画の見直しをおこなった。 コロナ禍において計画通りに教育活動を実施することが難しかったが、地域活動等は、工夫しながら可能な範囲で実施した。 教育資源やそれを活用した教育活動を整理することができた。また交流活動についても目的やねらいを整理することができた。 	D
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> 生活単元学習について授業の構想段階から、子ども理解ミーティングを実施し、子ども理解シートを作成して授業実践を行った。 キャリア教育全体計画の見直しやダイジェスト版の作成により、活用や共通理解がしやすくなった。 拡大教育課程検討委員会で情報交換をおこないながら、各学部の特色を明確にし、来年度の方向性を確認することができた。 	
自己評価	<p style="text-align: center;">B</p> <ul style="list-style-type: none"> 9月の公開研究会に向けた早い段階で学部ごとの話し合いを実施することができたが、事前の授業検討や事後の改善授業への丁寧な取組が必要である。 単元・題材一覧を作成することで、学部・学年の動きや学びの系統性が一覧でわかるようになった。 コロナ禍における地域活動は、発想の転換をして取り組んでいく必要がある。 	C
<p style="text-align: center;">↑ 評価基準 ↓</p> <p style="text-align: center;">A : 具体的な活動がなされ目標を達成できた B : 具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない C : 具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない</p>		
学校関係者評価と意見	<p style="text-align: center;">A</p> <ul style="list-style-type: none"> 実際の授業が勝負である。授業研究会が内々で終わるのではなく、実態差に応じた授業づくりを外部に発信してほしい。ICTを活用した授業や情報モラル教育にも力を入れてほしい。 	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	<ul style="list-style-type: none"> 研究内容を各方面へ発信し、外部の意見を参考にしながら、発達段階に応じた授業づくりを推進していく。 地域の教育資源を活用し、実体験を重視しながら教育活動を展開していく。 	A

(2)豊かな地域生活への支援

評価領域	地域支援・地域交流
------	-----------

重点目標	交流及び共同学習や地域との交流活動の計画的、組織的、継続的な実践。		P
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 各学部、分掌部が連携して、交流及び共同学習を計画的に実施し、内容の充実を図ってきた。 中学部の居住地校交流については小学部での実績を基に、地域の中学校でも継続実施できるようになってきている。 小学部や高等部の近隣の小学校や高等学校との交流については、課題を整理する時期にきている。 居住地校交流を行う前に、相手校で障害理解授業を実施することで、交流の活動内容が充実してきている。 		
具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> 各学部が、それぞれ特色のある交流及び共同学習を実施する。 交流相手校からの評価を生かしながら交流及び共同学習を充実させる。 地域の学校における障害理解授業の拡充を図る。 		
目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> 相手校の状況や本校児童生徒の実態について情報交換を行い、計画的に学校間交流や居住地校交流を行う。 交流及び共同学習、居住地校交流について活動の状況や課題と成果を確認する。 広報や地域行事への参加、地域での活動等により、地域に対して積極的に本校の教育活動を発信すると共に、地域からの評価について情報収集をする。 児童生徒が居住する地区の学校のニーズに応じた障害理解授業を実施する。 		
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍における新しい取組として高等部では、他県の特別支援学校とのリモート交流をおこなっている。 中・高等部では地域での社会貢献活動を中心に取り組んだ。 コロナ禍に配慮した交流の進め方について校内で共有し、相手校と丁寧な打合せも含め、各学部と連携しながら居住地校交流等の推進、障害理解授業を実施した。 		D
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> 学校間交流8校、居住地校交流小学部11校、中学部4校、地域との交流活動38回、障害理解授業9校で実施した。(R2年12月現在) 障害理解授業を実施することで、障害に関する情報を発信することができた。 		
自己評価	B	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍においてもできるだけ交流活動ができるように検討しながら取り組むことができた。今後はICT機器等を活用するなどして、コロナ禍においてもできる交流活動を検討していく必要がある。 	C
↑ 評価基準 ↓ A：具体的な活動がなされ目標を達成できた B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない			
学校関係者評価と意見	A	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器を活用した交流はコミュニケーション能力を培う良いツールになる。創意工夫しながら取り組んでほしい。将来的にICT機器等に慣れておくことも必要。 農福連携を望んでいる生産者もいる。農業体験等の交流を推進しながら就労につなげていくこともできる。 	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器を活用した様々の交流実践を積み重ねていく。またコロナ禍でもできる交流を検討していく。 活動の様子を広報する方法を検討する。(ツイッターやフェイスブックの活用) 		A